

# 龍馬通信

No. 40

2021年4月号

## 千姫の小径

## 清明～穀雨の候

水ぬるみ、山笑う春爛漫の季節。風景が鮮やかに彩られ、やわらかな風が吹き抜ける。鳥たちは思い思いにさえずり、恋の季節を楽しむ。厳しい冬の寒さに耐えて、草木は芽ぶき花が咲く。寒さが厳しい程、草花は勢いよく美しくその輝きをみせる。コロナ禍にあっては、待ち遠しい春であった。それだけに倅せな気分は一層のものになる。年度が変わり、別離（わかれ）と旅立ちの季節。コロナの為に、多くの喜びや思い出が寂しくささやかなものになってしまった。しかし若者は閉ざされ、ふさがれた日の中で友とわかち合った苦しみや悲しみを、未来への糧として、旅立っていった。新社会人の初々しい姿が陽光に輝く。夢と希望に満ちた若者達の未来に幸あれと祈る。冬の衣を脱ぎ捨てて、ちょっとお洒落な春衣装。コロナを乗り越える日がやってくる。絶対にやってくる。「サクラ咲く」あぎやかに咲き、いさぎよく散る桜。姫路城の西側にある「千姫の小道」。ここで桜を観ることを例年のこととしている。4月中旬。夫婦で小径を歩きながらいつもの会話「この桜あと何回見る事ができるかなぁ」。限りある生命だからこそ、今を大切に生きぬかねばならない。ひらひらと散る桜の花のひとつ、ひとつひらが、私達に「がんばれ、がんばれ」と呼びかけているような気がする。



※ 清明 4月 5日頃 ※ 穀雨 4月20日頃

## 龍馬と私

## 亀山社中 (2)

亀山社中の最大の仕事は幕府の監視（長崎奉行所）の目をかいくぐり長州藩の為に薩摩藩の名儀を借りて、軍艦や武器購入、譲渡に成功したということである。これは歴史的には画期的な事で、当時犬猿の仲であった薩長が、対幕という方向性の中で水面下ではあるが手を握り合った事になる。結果的にこの事が薩長同盟に連がり、維新の原動力になった事を考えると亀山社中そのものが薩長同盟成立のため薩摩藩が作ったプロジェクトチームであったかも知れない。（坂本龍馬と海援隊 織田毅著）その為、薩長同盟

が成立すると亀山社中は経営困難となる。龍馬はこれには立ち往生したが、薩摩藩小松帯刀から七千八百万両の支援を受けた事を後に姉乙女に出した手紙の中で回想している。実質的には亀山社中は2年程で消滅する。龍馬の幸運はこの時、薩長から出遅れていた土佐藩からの救い手である。当時土佐藩は国内産品を輸出し、軍艦・武器を輸入する為に、後の三菱を創業した岩崎弥太郎を責任者として「土佐商会」を長崎に置いていた。長崎での土佐藩重役後藤象二郎との面談が後の海援隊の誕生につながっていく。



## (閑話休題) 薩長同盟 (酒の銘柄)

私が高知へ帰った時の何よりの楽しみは、ひろめ市場の明神丸というお店のわら焼きのかつおのタタキを食べる事である。それはさておき、ひろめ市場では多くの店で日本酒を提供している。その日本酒の銘柄(ラベルだけかも・・・)が面白い。「海援隊」や「亀山社中」というのがある。長崎の地で起こった事で直接関係ないようだが、さらに言えば「薩長同盟」「船中八策」。飲んべえ大名、山内容堂(鯨海酔候)公にちなんだ「酔鯨」などもある。土佐人の大らかさと明るさが愛しく感じられる。



## 播州日誌

### (1) 「外国人雇用の実態」

現在、外国人雇用の主流を占める、外国人技能実習制度は厳格な法規制によって管理されている。受入れ機関はその設立から事業運営に至るまで、国の機関である外国人技能実習機構(地方事務所)の管轄下におかれ受入機関(監理団体)と実習実施者(実際に外国人を雇用し実習・研修を実施する会社等)を厳しく取締っている。これは過去の悪質な受入機関の不適切な管理状況を反省し、受入れ機関の在り方を根本的に改革・改善するための国の施策である。ただ私見ではあるが、平成5年発足した当時に比べて制度の基本的原則は大きく崩れている。国際貢献のため、開発途上国等の外国人を日本で一定期間(最長5年)に限り受入れ、OJTを通じて技能を移転する制度。というのが未来の目的とされるが、その後、27年を経過し、実態とはかけはなれたものになっている。技術を移転し、母国の発展に寄与するという崇高な理念は今や形骸化し、多くの来日する外国人の目的は語弊はあるが「単純に言って出稼ぎ」であると思われる。現実の中で理想を守り抜くことは至難の技である。すべての制度・機構・組織・法規制・管理方法の多方面で大きな矛盾を形成しつつある。はっきりと言って、今の「この制度は労働力不足を補う制度ではない」という理想を払拭して「持続可能な経済成長に欠かせない労働力を確保し経済の循環をスムーズにするための外国人雇用制度」に改めるべきだ。理想と現実(実態)の介離がこれ以上継続すれば尚さら矛盾は大きくなり働く者の自由と意欲を萎えさせることになる。すっきりと割り切って労働力不足を補う外国人雇用に制度を変更することが絶対に必要だ。そうすればコンプライアンスが進み、健全な外国人雇用が実現するものと確信する。



2021.3.21

### (2) 「健全な外国人労働者の受入機関をめざして」

念願の組合が成立した。BMサービス協同組合。今現在は理事の立場。最終目的は、外国人労働者の受入機関。今後の日本の労働人口の減少を考えれば、人手不足は必至の状況である。先発の受入機関は多く存在するが、その管理状況はどうだろう。1人3万~4万の管理料の割には行き届いた管理とは思えないケースが見受けられる。BMが目指すのは、労務管理の経験を活かして、労使協調して働ける労働環境作りだ。母国を離れ家族とも離れての生活は決して生やさしいものではない。経済は基本的に高い所から低い所へ流れる。日本の産業を支える外国人労働者がその在留期間を通して、安全で健康的な生活が出来、喜んで母国へ帰るといふ事でなければ、受入機関としては恥ずかしいことだ。組合は人に役立つこと、人に喜んでもらえることで成り立つものだと思う。常に日本人として誇りを持ち、世の為、人の為になることこそ、組合の存在意義であり、使命だと思う。

2020.8.27

## 「良書はほんの一握り」

昨年末から約70冊の本を読んだ。いわゆる乱読でジャンルをしぼっていないが、やはりコロナ関連のものが多い。70冊を読破して思う事だが、その中で本当に良書として役立った本が何冊あったらう。中には奇をてらってセンセーショナルに時事問題を取りあげ読者を煽っているものもある。あおり運転と一緒に売れたらよいといった本音がみえみえの「あおり本」は読者にとって迷惑である。例えば習近平はアホだから中国はよくて後10年で崩壊する。といった本がある。読者をバカにするのもいい加減にせえと言いたい。アホで国家主席が勤まるだろうか。広大な領土と資源と13億余りの人口を持つ国がそう簡単に崩壊するものではない。日本の経済力など中国の経済力に比べたら大人と子供のようなだし、日本が既に国力の停滞期に入った事など自明の理である。中国や韓国北朝鮮の悪口を書いておけば売れると勘違いしている安物の専門家に本を出す資格などない。特にお勧めするのが ★運気を磨く（心を浄化する3つの技法）田坂広志 光文社新書

その他、私のベストファイブをあげておく。

- ① 本物の教養 出口治明 幻冬舎 新書
- ② 自分の頭で考える日本の論点 出口治明 幻冬舎 新書
- ③ いのちをめぐる物語 神戸新聞社編
- ④ 学校の大問題 石川一郎 SB 新書
- ⑤ 武漢日記 方方 河出書房新社

2021.3.29

## 「社労士への道」

### 第8回 「劇的な出会い」

LC（ライオンズクラブ）への加入が、大きな転機となった。中でも（株）浅田農産の浅田会長との出会いは劇的なものであり、私の一生を変えた。クラブのアクティビティ（奉仕事業）でシンガーソングライターの河嶋英五のチャリティーコンサートが企画され、入会間もない私もその準備活動をしていた。市民会館のロビーでメンバーが雑談をしている時、唐突に浅田会長から手招きされ、近づいてみると「実は頼みがあるんやけど、会社の方、労務管理が不十分で、何かと未解決の問題がある。一度会社に来てくれんか、色々相談したい事があるので」という事であった。数日後にアポを取って訪問すると、社長室に呼ばれ、開口一番「就業規則あたりからやってくれますか」。これで顧問契約は成立した。その時点では報酬の話もなく、報酬の方は後日決定した。すると夢のように話が進み私の周辺は一度にあわただしいものになった。グループ会社として、アサダエッグ、久米テクノファームを擁し、雇用規模も有に150名を超えていた。創業者として一代で、数十羽の庭先養鶏から200万羽超を飼育する当時兵庫県第1位の生産量を誇る養鶏場に育てあげた。兵庫県養鶏協



会会長、日本養鶏協会の副会長を歴任され、業界ではまだ珍しかったTVCM（サンテレビ）を提供する程の勢いであった。姫路・和田山・佐用（兵庫県）久米・勝央（岡山県）船井（京都府）に農場を持っていた。ある時には会長と同行、又は単独で各農場まわりをした。創業者としての会長は、何事にもよらず自分中心であり、問題解決も殆ど自らの力で片付けていた。例えば農場周辺の住民からのクレームには、自ら現地に乗り込んで解決するというやり方を何度も見た。いわゆる豪放磊落な性格が、一代でここまで事業を拓大された原動力ではなかったと思

れる。浅田農産との契約後、特に私の社労士としての顧問先も順調に増えていった。雇用規模が大きい分、発生してくる問題も多くあった。労災事故も多く、治癒後の再発事例もあり、労働組合の介入もあった。船井農場での不行跡行為（公金横領）をめぐって解雇し

た社員が地元の合同労組に加入。すぐに団体交渉の要求があり、不当解雇撤回が議題であった。色々と私の知っている限りの初期対応のアドバイスはしたが、最終的には会長自らが団体交渉前の話し合いを申し入れ、私自身も同行して地元の喫茶店での話し合いになった。執行委員長を相手に粘り強く交渉を続け、結局、金銭的な解決となった。私が意見を述べる間もなく、とにかく発言を繰り返して、いかに自分が養鶏業について精魂をこめているかを語りかける。弁舌さわやかと言うわけではないが、自分の言葉で持論を展開する会長に組合側も折れて、自己都合による退職、退職金の上積み支給ということで決着がつき、組合は翌日付けで撤収した。会長との思い出は、この事だけではなく数多くある。農場に用事が出来ると愛車のベンツを駆って高速と山道をまっしぐら。流石の高級車もボディは傷だらけになっていたが、そんな事は意に介さない。焼肉に行っても、ラウンジに行っても大胆な言動で人をケムに巻いてしまう。もう時効なので、ただし反省をこめて告白します。多分、佐用のインター近くのレストランで昼食となり、夏の季節ということもあって会長から「先生、一本だけ、一本だけビール飲みましょうか」と誘われ、酒好きな私は、うっかりとうなづいてしまった。「よっしゃ、よっしゃそんなら、一本ずつと言う事で」ちょっと話が違っていたが、あえて反論できなかった。ほろ苦い思い出である。色々と会長と交わした言葉の中で忘れられない言葉がある。「会長、今現在何が一番楽しみですか」と聞く私に「そうやなあ、まあ夫婦で揃ってゴルフする事かなあ」結構やんちゃな一面を見せる会長だったが、その時のしんみりとした口調が忘れられない。心の奥底では、きっと奥様を深く愛しておられたのであろう。そう言えば、クラブのパーティーなどへよく同伴されていた。奥様からは「ご苦労様」といつも声を掛けていただいた。

海外旅行での思い出をひとつ。LCのオセアルフォーラムがタイのバンコックで開催された。クラブからの参加は、会長ご夫妻と私の三人のみ。サラリーマン時代によくタイに行っていたので、先乗りで安いツアーで先着。空港でお迎えする事にした。そしてその夜はリバーサイドのレストランで海鮮料理。オーダーからチップまで総てこちらで済ませておいた。アロハのような衣装で来られたお二人が仲良く食事をしている様子を今でも思い出す。残念乍ら写真の一枚も残っていない。リバーサイドにたいまつが揺れて、快いメコン川の風に吹かれながら談笑した一夜の事が忘れられない。浅田農場に関するようになって私にとっては、一番大切なものを頂いたと思っている。雇用労働者の数が多い分、色々な問題が発生した。組合の介入もその一つだが、中にはレアなケースの問題もあり、調査、解決に時間がかかる事もあった。その一つ一つに誠実に向き合う事で私の社労士としての経験が飛躍的に広く深いものになっていった。この経験則は今も私の仕事の中に活かされている。おそらく新人の社労士が10年かかる経験を3~4年で得た事になる。そんな意味で私の社労士への道の中でも最も充実した日々であったとも思われる。二、三度は、頭ごなしに怒られたこともあった。事務所への帰り道、悔し涙でハンドルを濡らすこともあった。

特に会長がLCの会長となり、私が五役の一人として、一緒にクラブ活動した一年は何かと意見の食い違う事があった。その為、任期を終えた平成14年(2002年)6月。契約を成立させた同じ社長室で解約を宣言された。誤解の積み重ねのようであり、悲しくもあったが、きちんと3ヵ月分の報酬を支払ってくれた。きっと私への敢闘賞であったと今も思っている。解約とはなったが、私は浅田会長との出会いは、私の一生の宝物だと思っている。厳しさは私への励ましとなり、優しさは私の喜びとして鮮明に記憶されている。長い時間を経た今も、それは続いている。怒った時の顔と、優しさに満ちた顔が交互に頭に浮かんでくる。最近は少しだけ後者の方が多いうだ。奇しくも紆余曲折を経て浅田農産の後継となった会社に、顧問社労士として復活し現在に至っている。訪問のたびに、事務所で怒られた事や、社長室で話し合った事を昨日のように思い出す。今は故人となられたが、深いご縁を感じている。会長、私、今も社労士として頑張っています。いつまでも見守っててください。

